

表 題	葬式場の設定と配置		
著 者	高見 晴彦(取り纏め)		
作 成 日	2023年11月16日	最終更新	2023年12月1日
キリスト教会葬儀研究所(CCFI) http://www.ccfi.jp/ 2023.11期テーマレポート [実務者向け] 本レポートは主に葬儀士(葬儀実務者)向けに作成されたものです。葬式場を設営するに当たり、葬礼のための領域を設定することや、棺や遺影をどのように配置するかということを取り扱います。 2023年11月23日 "葬礼領域の設定"一次稿 表題変更 2023年11月26日 "棺の配置と向き"前半追加 "葬礼領域の設定"一部加筆修正 2023年11月29日 "棺の配置と向き"後半追加 全体に加筆修正 2023年11月30日 "遺影の配置"追加 2023年12月 1日 "遺影の配置"→"宗教儀礼との関係"一部加筆修正			

葬式場の設定と配置

▽葬礼領域の設定

葬式場の設営に当たってはまず、宗教・文化あるいは実用的な理由により、葬礼を行う領域を予め設定することを求められる場合があります。代表的な例としては境界線上に幕等を張ったり、一定範囲を囲むように目印を置く等して、日常の空間と葬礼を行う非日常の空間(異化、浄化、聖化等がされた空間)を切り分ける形で行われますが、灯りやシンボル等を中心(厳密に位置としての葬式場の中心ではなく、意識の中心として)に据えたり、聖水を撒いたり香を焚く等してその一帯を非日常の空間と見做す形で行われることもあります。ただし寺院・教会等の宗教施設や、葬儀会館等の本来葬式場として造られた建物の場合には、その領域が常態的に非日常の空間であるため、葬礼を行うに際して改めてその領域を設定することを要しないとされる場合もありますが、慣習や実用的な理由(当該葬礼に用いない物を隠したい場合や動線を明示したい場合等)、またその他の特段の事情(例えば寺院が他宗旨の葬礼のために本堂を貸すに当たって、常設の本尊等を隠すような場合等)により、寺院等においても葬礼を行う際には幕を張り巡らせること等を求められるケースもあります。

◇宗教・文化的側面から

宗教や文化により具体的な理解は異なりますが、祭儀等を行うに当たり「日常の世界⇄非日常の世界」「不浄な世界⇄清浄な世界」「俗なる世界⇄聖なる世界」「生者の世界⇄死者の世界」等を並立させ、現世に属するものと神秘に属するものを切り分けることは普遍的な感性だと言えます。日本では神社等で見られる注連縄や鳥居による結界がその代表的な例ですが、出雲にある生者の国と死者の国を結ぶとされる黄泉比良坂の"坂(サカ)"が本来は"境(サカイ)"を示す¹⁾といったこと等も、この意識の延長線上にあるでしょう。そのため葬礼を行うに当たってもこのような感性に沿うように様々なやり方が考えられてきました。

よく知られるものとしては葬式が室内化し始めた大正末期頃から90年代頃まで広く見られる葬式場を取り囲むように張り巡らす幕(白幕、白黒や白浅葱色等の鯨幕、水引幕、デザイン幕、紋入り幕等)があります²⁾が、関西で見られる"四天櫓"(してんしきみ=斎場や墓地で魔除けや動物除け等の目的で四隅に櫓を立てた名残で、葬式場で祭壇の脇に1対、

門前に1対の櫓を立てた風習。平成期頃には祭壇脇の1対は衰退し、門前の1対のみが残っていることも多かったが、近年では葬儀の縮小に伴いそれもほとんど見られなくなった)や、北関東・中部・九州等で見られるという"仮門"(かりもん＝棺をくぐらせる仮設の門。故人を生者の世界から死者の世界へ移行させ、その後に門を壊したり墓と一緒に埋めたりして、故人が死者の世界から戻らないようにするという³⁾)の風習等も類型でしょう。

キリスト教ではカトリック等で見られる聖水の撒布(灌水)や焚香(焼香・献香)による空間の聖別・浄化等が代表的で、祭壇上にロウソクを据えて火を灯すこと等も重要視されています。また遺体や柩の回りをロウソクで囲むという習慣も安置場所を結界するという意味で行われているようです。翻ってプロテスタント諸派においては空間の聖化・浄化という事柄に対する関心は薄く、聖書を中心に据えれば(物理的にではなく神の言葉があれば)足りるとされることも多いでしょう。

◇実用的側面から

幕等によって空間を仕切る実用的な理由としては、「葬礼を行っていることを対外に告知する」「動線を明示する」「人目を遮る」「葬礼に使用しない物を隠す」等が主です。特に自宅等で葬礼を行う場合には周辺に日常生活のための物や空間がありますから、非日常空間との異化を理由とせずとも単に生活空間と葬礼空間を切り分ける必要のために幕等を張る場合もあるでしょう。また葬礼に参加する近親者等が周囲の人目に曝されたり、逆に周囲の人々が自らに関わりの無い葬礼の現場を目にすることによって互いに心的に傷つく場合もあるため、その保護のために幕や衝立等で視線が通らないように空間を切り分ける必要がある場合もあります。葬儀会館や火葬場等においては周囲を巡らせた大型の植栽等もこの類と言えるでしょう。

◇幕張りに関する近年の傾向と施行上の注意

近年、葬礼の縮小化・個人化傾向に伴い、特に都市部では葬礼を行っていることを対外に告知するために屋外に幕を張るといったことはほとんど見られなくなり、また葬儀会館等においては動線の明示はローブパーティション等で行われることも多いため、実用的側面からの幕張りの要請は自宅葬等でわずかに残る程度です。また自宅葬においても参加者が身内やごく親しい者だけということも多く、生活空間や物を隠すことが必要でない、あるいは逆に葬礼に「故人らしさ」の表現を求める人にとっては、故人の生活していた空間を積極的に開示することを指向するようなケースも少なくありません。さらに宗教儀礼と

しての葬儀よりも社会儀礼としての告別式等を中心として葬礼が営まれる傾向が強まっていることや、宗教者においても「聖化よりも日常との連続性の中で祭儀・葬礼等を行う方が参加者にとっても安心であろう」といった、儀礼性よりも参加者の感情を優先する考え方も特に若い世代において少なからず許容されつつあり、宗教的にも文化的にも幕張りの要請は減少しています。

このように社会的に葬式場の幕張りに対する要請が縮小している中で、葬儀業界側が十分な説明と同意に基づかない施行をしトラブルとなるケースも見られます。打ち合わせの際には幕を張る意義を明確にし、必要を認められた上でその範囲や方法(壁や天上にピンで穴を開けるような場合には特に)について消費者の同意を得る必要があります。単に慣習・伝統だから、という理由では足りず、たとえ料金を取らないとしても消費者の望まないサービスを押しつけるようなことがあってはなりませんし、当然追加の料金を得るために不要な幕張りをするようなことは論外です。

▽棺の配置と向き

日本では地域によって時期の差はあるものの、昭和期をかけてにいわゆる祭壇文化が隆盛しますが、この前期には一般的に棺は参列者たちから見て祭壇の“奥”に置かれていました。祭壇というと象徴的なのは最上段の宮飾りですが、これは葬列時代には棺を納めた輿の前に簡単な台を設けて葬礼を行っていたものが、葬列の減退により室内に固定化されていく中で輿が飾りとなって半分あるいは前面だけとなっていったものだと言われています。そのため棺は宮飾りの奥(本来的には輿の中)に置かれ、結果的に棺の前に来ることとなった宮飾りは「棺前(かんまえ)」等とも呼ばれていました⁴⁾。

しかしその後、祭壇の大型化に伴い棺が祭壇の奥にあっては出棺等に不便であったことや、葬礼の中で社会的に参列者が死者と対面して別れの時を持つ告別式の重要性が高まっていたこと等から、実的な利便のために棺を祭壇の手前に置くことが増えていきました。過渡期には祭壇の手前に棺を置くことを従来とは違うために「前棺(まえかん)」等と呼ぶこともありましたが、現在では棺は当然のように祭壇の手前に置かれるようになったためすでに死語となり、逆に昔の事情を語る際に「後ろ棺」等と言われることもあります。

◇宗教的傾向から見る棺の位置

前棺が現在の普通であると前提した上でさらに宗教的な違いを見ると、仏教の葬儀では

一般的に棺は"祭壇と宗教者の間"に置かれますが、プロテスタントでは"宗教者と参列者の間"に置かれます。これは葬儀に限らず通常それぞれの祭儀に際して宗教者がどちらを向いているかということに関係(仏教では本尊に向かって勤行し、プロテスタントでは会衆に向かって説教する)し、葬儀に際しても"宗教者の前"に棺を置くためと言えるでしょう。この意味からカトリックでは棺は祭壇に向けての礼式と会衆に向けての礼式のどちらをも行うため、棺は"宗教者と同程度の奥行き"に置かれ、どちらに向かっても礼式を行えるように棺の周りにスペースが確保されていることが多いでしょう。

なお無教会主義的な一部のグループでは宗教者による礼式を前提としないため、棺を葬式場の中央に置いて参列者が全方位から棺を囲んで祈るという様態を採るところもあります。無宗教の告別式においてはこれらの理由が無いため、葬式場の形態や飾りとの兼ね合い等から位置が定められます。また左右方向では多くの場合棺は中央(必ずしも部屋の中央ではなく通常は祭壇の中心と合わせて)に置かれますが、稀に日本のプロテスタントの一部の教派等では「死者が拝礼の対象とならないために」との理由から中央を避け、左右何れかの端に棺を置くとされる場合があります(これらは筆者の経験に拠ります)。

宗教施設において会堂の奥に陣(仏教、本尊仏が置かれているところが内陣)や壇(キリスト教、祭壇・聖壇・講壇等)等が設けられている場合、棺(や装飾生花等)をその中や上に置くか、外や下に置くかはその施設や宗教者の考えに拠りますから、施行前に必ず確認しなければなりません。いずれにせよ宗教的にはどうあれ、自宅等スペースに限りのある場所で葬礼を行う場合にはこれらの限りでは無く、実地に即した配置を宗教者と共に考えなければなりません。

◇棺の置き方

日本では比較的多くの場合、棺は横方向(葬式場正面に対して左右向き)に置かれますが、このことに殊更に理由が意識されることはありません。恐らくは、先に述べたように輿に載せられた棺を前に葬礼を行っていた頃であれば輿の進行方向と相棒方の両側が空いている方が担ぎ上げる際に都合が良かったことや、参列者から見て面が広く輿の装飾等の見栄えが良かったこと、仏教葬儀が多く参列者が一方向から見る葬式場の奥に配置する際に省空間であること、また死者に寄り添う場合に側面からの方が顔に近づきやすいこと等、総合的な合理性から習慣付いたものでしょう。

横置きが多数派であることから、翻って棺が縦方向(葬式場正面に対して前後向き)に置かれる際には何らかの理由が付されることが多いでしょう。例えば理念的な理由付けとしては、カトリックや聖公会、ルーテル派等キリスト教の一部教派において見られる、「死者が起き上がった際に祭壇あるいは会衆に正対するように」といったものが代表的でしょう。また海外のキリスト教葬儀において棺を縦置きにする習慣が比較的多く見られることから、その方式が正統であるという見方がされることもあります。さらに実際的な理由として、近親者が棺を囲んで葬礼を行う場合に周囲に集まりやすい(横置きの場合、参列者が部屋の入口側に偏りやすい)等といったこともあります。特に近年増加傾向にある小規模な無宗教告別式等では、祭壇を飾らず葬式場の中央に棺を置いて近親者で囲んで過ごすという様態もまま見られるようになりましたが、入口に対して縦長に造られた部屋が多いということもあり、この際には棺を縦置きにしていることも少なくありません。

◇棺の頭の向き

日本では死者を寝かせる際に頭を北向きにする慣習(北枕)が強く見られますが、これは昭和期まで圧倒的多数であった仏教葬儀の影響です。釈尊(仏陀)が沙羅双樹の下で入滅した際、頭が北向き、顔が西向き(頭北面西右脇臥ニずほくめんさいうきょうが)であったという伝承から、その姿にあやかって同じように頭を北向きにしたことが、死者の扱いとして一般化していったものです⁵⁾。また釈尊の見つめていた西の方角には阿弥陀如来の浄土(西方浄土)があると言われており、死者が南北ではなく東西に寝かせられている場合には頭を西向きにするということが広く行われています。ただし仏教葬儀に関連して棺を縦置きにする場合、例えば葬儀後に棺を置き直して告別式を行うような場合には、方角に関係なく頭を本尊のある祭壇側に向けて置きます。これは日本語に「足を向けて寝られない」という慣用表現があるように、尊い相手や恩義のある相手に対して失礼に当たらないようにという礼節や遠慮の表れであり、日本を含む一部の地域に特有の感性でしょう。

一方キリスト教においては方角的な拘りはありません。棺を横置きにする場合には献花等を行う際の動線に配慮して頭の向きを定めることが最良でしょう。2023年7月期テーマレポート「献花」の中でも触れたように、献花の際には参列者が頭側に退くのが自然であることから、退路となる方向に棺の頭を向けるのが良いでしょう。また会堂が左右対称でどちらにでも退ける場合であって、かつ司式者が登壇する際の立ち位置が左右どちらかに振れているなら、その司式者が立つ側に頭を向ける方が良いでしょう。直近の遺族等は故人の顔近くに寄りたいため、こうすると自ずと司式者の前に座ることになるからです。

これらの条件に当てはまらない、あるいはどちらに向いていても差し支えないような場合には、日本の慣習に則って北向きや西向きに置いたり、式場の右手(上手)に向けて置く等すると、参列者の中でノンクリスチャンの人々がいても戸惑いは少ないでしょう。ただし筆者の非常に個人的な意見としては、多くの場合で棺の頭は右手よりも左手に向ける方が好ましいのではないかと考えています。近親者が棺に寄り添って故人に触れるような場合、一般に棺の中央付近に立って顔の側に身体を捻りますが、日本人では右利きが多いために左向きの方が自然に利き手が伸ばせるからです。この事情は特にお別れをする人が車椅子等に座って棺の横に添う場合に顕著です(身体を自由に捻れないため)。

棺を縦置きにする場合、前出の日本人の感性を脇に置いて、一般的には棺の頭は葬式場の奥側に向いている方が良いでしょう。これは葬式場の入口から棺に近づいた際や式中に、振り返らなくても故人の顔が見えやすい方向だからです。キリスト教においては長らく「信徒の場合は足を祭壇向き、教職の場合は頭を祭壇向き」という意見が多く聞かれました。これは(復活のイメージとして)死者が立ち上がった時に日頃の祭儀(礼拝)におけるそれぞれの向きと同じになるから、という理由です。しかし海外のキリスト教葬儀においては棺の向きに一貫性はなく、それぞれの地域の習俗や感覚に従っていると見られることから、この解釈も日本で独自に広まったものかもしれません(元々アングリカンチャーチでこの解釈が見られるという情報がありましたが、出典が明確ではありません)。なお今日、日本においてもカトリックでは信徒・教職を問わず頭を祭壇に向ける傾向が強まってきているそうです。

▽遺影の配置

昭和初期頃に見られ始めたという遺影⁶は昭和中期以降には祭壇上にあって当然と受け止められる程にもなり、また葬礼の比重が告別式に偏っていくにつれ祭壇の中心に置かれるようになります。しかし平成期では葬礼の見直し機運の高まりから本尊等が隠れる位置に遺影を置かないよう宗教界側から要請されることも増え、祭壇の中心をやや避けて置かれることも少なくありませんでした。近年では葬礼の個人化・小規模化に伴い遺影自体を用いない、あるいは少なくとも従前のような大型(一般的には四つ切り程度以上)の引き伸ばし写真を用いずスナップ写真やデジタルフォト等を用いるケースも多くなり、遺影が祭壇に当然あるというようなものでは無くなってきています。

◇宗教儀礼との関係

葬礼に宗教儀礼を伴う場合、一般的には葬儀(宗教儀礼)に続いて告別式を行います。この切り替えの際に遺影の位置を動かすということはありません。そのため前述のように遺影の位置を決める際には宗教儀礼において尊重されるものを隠してしまわないよう配慮する必要があります。仏教であれば仏像や名号掛け軸等の本尊、神道であれば神鏡・真榊・霊璽(御霊代)・名旗等、キリスト教であれば十字架・聖書・ミサ祭壇(ミサ典礼を行うための中央のテーブル)・復活のロウソク等について、参列者から見えるべきものを宗教者と相談の上で遺影の位置を決めましょう。またこれは遺影のみならず祭壇飾りや生花についても同様です。例えばカトリックではミサ典礼に重きが置かれるため、ミサ祭壇上面が見えるよう全体的に低く生花や遺影を配置する必要があります(また棺の周囲を廻りながら献香するため、棺周りの飾りは幅もあまり大きくならない方が良いでしょう)。プロテスタント教会では聖壇付近に空間的余裕が無いことも多く、場合によっては聖書や燭台の方を生花等で隠れない位置まで持ち上げたり、棺の前に回してくるようなケースも有り得ます。

プロテスタント教会において説教台が聖壇の中央に置かれている場合、遺影を同じ中央に置くと故人の顔の上に牧師の顔が重なるために収まりが悪い印象を受けます(業界人の中では俗に"トーテムポール現象"等と言うこともあります)。こういった場合には中央を避け左右どちらかに振る方が良いでしょう。また説教台が左右に振られている場合でも、故人やその遺影が拝礼の対象とならないようにという理由で中央を避けて置くよう要請される場合もあります(前出の「棺を脇に」と要請されることは滅多にありませんが、「遺影を脇に」と要請されることはままあります)。

◇葬式場や棺との関係

棺が横置きでかつ遺影を左右に振る場合には、基本的に棺の頭側に振る方が良いでしょう。これは棺の頭を退路側に向ける方が良く同じ理屈です。しかし聖壇が狭く棺と説教台が近接しているような場合には説教台の反対側(棺の足側)に遺影を振ることもありますし、逆に棺の頭を説教台と逆向きにすることもありますから、実地に即して見た目のバランスや動線、遺族感情や宗教者からの要請(位置的に儀礼の邪魔にならないか等)等、優先すべきことが何かをよくイメージしながら合理的な配置を決定する必要があります。なお棺の頭の方向に遺影と説教台が偏ることで空間的にバランスが悪い場合は、棺を基準に遺影と対称になる位置に適当な大きさのアレンジメント(籠花)等を置くと緩和されるで

しょう。

上下方向には一般的に棺よりやや高く、本尊等より低い位置に置かれます。参列者が着席した時に遺影が前席の人の肩越しに見える高さ以上であることが望ましいですが、高すぎるとやはり遺影が拝礼の対象であるかのような印象を抱きかねないという懸念が宗教者から呈される場合があります。また参列者が少なく座った際に前後の重なりがあまり無いような場合、特に葬式場が自宅等で参列者と棺との距離が近いような場合には、高い位置に視線が行きにくいので、棺の手前に同じ高さで遺影を置くのも一案です。

◇大型の遺影を用いない場合

Ｌや２Ｌサイズ等の小型の写真を用いる場合や、タブレットやデジタルフォトフレーム等に遺影を映すような場合には、棺の蓋の上や焼香台・献花台等の上にそれらを置いても良いでしょう。この場合には故人の顔を見るために棺の蓋を開ける際等に邪魔になることもあるため、通常とは逆に棺の足側に振ることも多くあります。スナップ写真等がたくさんあるような場合には、大きめのボードに貼ってイーゼル等で棺の脇に立てるような飾り方もできます。写真の他にも寄せ書き等を一緒に貼り、小さなメモリアルコーナーを兼ねることもできるでしょう。ただしこれも宗教者によっては少なくとも葬儀(宗教儀礼)の間は退けるように要請される場合もあるので、よく相談する必要があります。

*1世界の聖典シリーズ5・ひろさちやが聞く神道の聖典 p21/すずき出版/1993

*2増補三訂 葬儀概論 p126, 碑文谷創, 表現文化社, 2011

*3民俗小辞典 死と葬送 p90, 新谷尚紀 関沢まゆみ編, 吉川弘文館, 2005

*4増補三訂 葬儀概論 p181, 碑文谷創, 表現文化社, 2011

*5増補三訂 葬儀概論 p108, 碑文谷創, 表現文化社, 2011

*6増補三訂 葬儀概論 p64, 碑文谷創, 表現文化社, 2011